



# アンディ・ウォーホルの

「悪魔のはらわた」に続いて、またも真紅の血で彩る狂気の傑作!

# BAD



大都会ニューヨークの恥部に天才ウォーホルがさしむけた冷酷非情の女殺し屋集団!

〈カラー作品〉

キャロル・ベイカー

ベリー・キング

スーサン・ティレル

カテファニー・カシーニ

総指揮アンディ・ウォーホル

製作ジェフ・トーンバーグ

監督ジェド・ジョンソン

音楽マイク・ブルームフィールド

アメリカ映画

日本ヘラルド映画



★恐るべき女だけの殺人集団！

美しい娘が、車に乗ったままのジャッキを倒れた男の体の上に落とす。骨がメリメリと音をたてて砕ける。娘は、表情一つ変えず、ナイフを取り出すと、死んだ男の指を切り刻んでいく……。

ニューヨークの夜を震撼させた女だけの殺人集団。これは、彼女たちが、女性特有の残酷さで犯しつづけた殺人のかずかずを描く戦慄のスリラー・ドラマである。

アンダー・グラウンド・シネマの雄、アンディ・ウォーホルが、恐怖のメルヘン「悪魔のはらわた」「処女の生血」などで商業ルートに進出。この「BAD」も、ウォーホル・ファクトリーで作られ出したものだが、今回は都会にひそむ狂気の本質を、きわめて日常的な次元から捉えたものだけに、その恐怖の度合いに一層のなまなましさが増えられている。

★電話一本で、殺しの斡旋

主人公のエイカン夫人は、典型的なアメリカ中流家庭の主婦である。だが、平凡な日常生活の陰で、彼女は、

「殺しの斡旋」を管理している。自ら手を下せない都会人たちが、彼女に殺人を依頼してくる。夫人は、それらの仕事を、輩下の美しく若い娘たちにあてがう。それは、夫人にとっては、電話一本で済むサイドワークなのだ。

「私たちは、坐って考えていました。もし、私たちの知り合いの女の子が、本当に「悪」だったら何をやるだろうかと。その時、アンディ・ウォーホルがこう言ったのです。いつも起こっている犯罪でいいじゃないかと」、脚本担当のパット・ハケットとジョージ・アバグナロは語っている。

赤ん坊を窓から舗道へ放り投げる若い母親、映画館に火を放つ双子の姉妹、それらがウォーホルの言う「犯罪」なのだ。ドラマの中心に据えられているのは、私たちの身のまわりにある都会的な錯綜した人間ドラマだ。そして、人々の心の底から吹きあげる殺意。それを、きわめて平然と、しかも冷酷に代行する娘たち。このドラマの底に流れるものは、現代アメリカに対する痛烈な皮肉でもある。

★ウォーホル一家総出演！

エイカン夫人に扮するのは、20年前「ベビードール」で一躍話題となったセクシー・ブロード、キャロル・ベイカー。彼女の嫁メアリーに「海流の中の島々」のスタン・ティレル。エイカン夫人が雇った唯一の男性殺し屋LTに「リップステイック」のペリー・キング。そして、エイカン夫人輩下の女性殺人集団の顔ぶれに、「処女の生血」のイタリア女優ステファニア・カシーニ、マリア・スミスなどのウォーホル・アクトレスが参加。

製作担当のジェフ・トーンバーグは24歳、監督のジェド・ジョンソンは、ウォーホル作品の編集を手がけていた人で27歳。ともに20代のヤング・コンビが、この作品を作り上げたわけだ。脚本担当のパット・ハケット女士とジョージ・アバグナロは、そろってウォーホル一家のメンバーである。また、音楽担当は、アメリカのトップ・ブルース・ギタリストで「イージー・ライダー」を手がけたマイク・ブルームフィールドである。ニューヨークでオール・ロケ、製作費百五十万ドルで、通常のウォーホル作品とくらべて、三倍の費用をかけて製作された。



■ゴールドデンウィーク

戦慄の大ロードショー決定！

新宿東急

(200)  
1981



＜カラー作品＞アメリカ映画 日本ヘラルド映画



アンディ・ウォーホルの **BAD**

アンディ・ウォーホル/ジェフ・トンバーグプロ作品